



✓登場人物を押さえて、主人公の気持ちを考えよう

甲陽学院中学出題

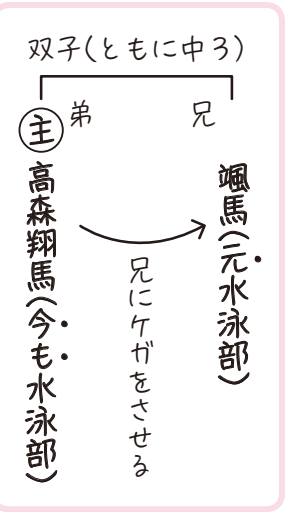
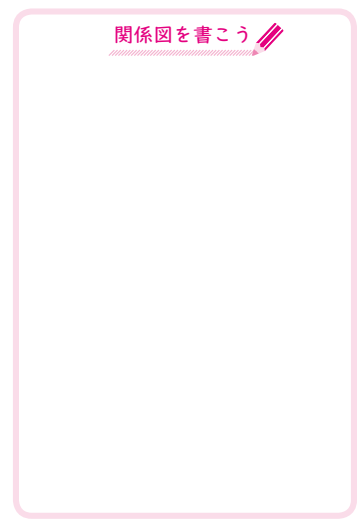
中学三年で水泳部員の高森翔馬は、タンDEM自転車事故で同じく水泳部員だった双子の兄の颯馬に足のけがを負わせてしまった。以下は、無理をしてプールで倒れ、保健室に運ばれた後の場面である。

大変な場面ですね。さあ、さつきと同じことをやってみましょう。

- ① 登場人物を○で囲んでください。
- ② この本の空いているスペースか紙に、名前を書いてみましょう。
- ③ どんな関係か、主人公がどんな人か、どういうことを思っているか、ひと言でいいから書いてみましょう。

次ページの図と似ていればOKです。

関係図を書こう



そこまで図に書く必要はありませんが、「高森翔馬は、きっと双子の兄に対して申し訳ないと思っているだろうな。罪悪感を感じているだろうな。だから無理をしてプールで倒れてしまったのかもしれないな」といったことを頭に入れて、読み進めていきましょう。

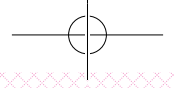
えっ!?! この先どうなるかって? これだけでは、予想するのが難しいですね。ただ、すでに事件が起こってマイナスの状況ですから、プラスになっていくと考えられそうです。

海城中学出題

矢代大地(「俺」)は中学二年生。入学直後の実力テストで学年一位になったが、その後はどんなに頑張っても二位だった。悔しがる大地だが、とあるきっかけで、常にトップの生徒が教室では影のうすい百井裕樹であることを知ってショックを受ける。が、トップであることをひからかすこともなく、常に謙虚な百井の人がらにふれ、大地は百井との関係を深めていく。そんなある日、一緒に県内トップの進学校へ進学するつもりでいた大地に、百井は中三になる四月に引越すことになったと告げる。

2

人物関係のレッスン【リード文に注目しよう】



「僕」(松岡清澄)は、祖母の影響で手芸や刺繍を趣味にしていた。中学時代にその趣味をからかわれたことがきっかけで同級生から浮いてしまい、友だちを作ることができず、家族から心配されていた。高校入学後は、すぐ後ろの席だった宮多に話しかけられるようになり、彼のグループに入ることができた。そのことを祖母は喜んでくれた。

昼休みの教室には、机をくっつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることがができる。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

宮多たちは、にやんこな人とかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。
「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなった。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅつと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

問一——線部1「もう、相槌すら打てなくなってきた」とあるが、この時の「僕」の気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宮多たちは楽しそうに話しているのに、自分だけ会話についていくことができず、これ以上楽しいふりをするに後ろめたさを感じている。

イ 友だちを作りたいと強く望んでいるのに、宮多たちの話を聞いているだけで積極的に話しかけようと思わない自分を情けなく思い、気持ちが沈んでいる。

ウ 友だちを作らなければならぬと思っているのに、宮多たちの会話に入れないうまま自分だけが取り残されていき、気持ちがくじけそうになっている。



工 宮多たちの会話に入れてもらえず、落ちこんでいたが、いつも自分をばげましてくれる祖母のことを思い出し、なんとか自分を奮い立たせようとしている。

問二 — 線部2「その顔を見た瞬間『ごめん』と口走っていた」とあるが、この時の「僕」の行動や気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人でいても全くさびしそうにしていないう高杉の姿を見た瞬間、一人でいる人間はさびしいと決めつけていた自分の浅はかさに気づき、グループ内の会話から抜けて高杉にわびる言葉がふとこぼれ出た。

イ 孤立していても堂々と落ち着いている高杉の姿が目に入った瞬間、孤立を恐れる今の自分を情けなく思う気持ちが急に高まり、気づいたら会話の輪から抜けることを四人にわびる言葉を発していた。

ウ 自分に正直であることをつらぬいて一人でいる高杉の姿を見た瞬間、心をいつわり周りにうまく合わせている自分が急にずるい人間に思えてきて、その罪悪感から高杉にわびる言葉が思わず口をついて出た。

エ 孤立を気にせず自分の趣味に没頭している高杉の姿が目に入った瞬間、そういう生き方こそが自分にはふさわしいと思う気持ちが急にわき、四人にわびて会話の輪から抜ける言葉を感情のままに発していた。

答えを選びましたか？ 区切って、それぞれ○か×か（あるいは△か）書きましたか？

では、解説していきます。まずはリード文がありますね。大事な大事なリード文です。

「僕」は、中学時代に友達をつくることができず、家族から心配されていた中で、高校入学後にグループに入ることができたとありますね。そして、そのことを祖母は喜んでいたと書いてあります。

自分から積極的に友達をつくらうとしたわけではないこと、祖母が喜んでくれることが影響していることが読み取れます。

本文の解説は省いて、問一の選択肢から見ていきましょう。

ア 宮多たちは楽しそうに話しているのに、／自分だけ会話についていくことができず、／これ以上楽しいふりをするに後ろめたさを感じている。

前半二つは明らかに正しいですね。最後ですが、「楽しいふり」をしていたのかどうかという、そこまではなさそうです。

相槌を打てないのであって、楽しいふりはしていませんね。祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとしたのであって、楽しいふりをするに後ろめたさも感じられません。

6

「選択肢」の精読